

副大統領の存在



軽部 謙介

帝京大学 教授 (元 時事通信社 解説委員長)

民主党の大統領候補にジョー・バイデン前副大統領が確定した。共和党のドナルド・トランプ大統領との一騎打ちになる。戦後、副大統領経験者で大統領に上り詰めた政治家は5人。もしバイデンが選挙に勝利したら、ジョージ・H・ブッシュ（ブッシュ・シニア）以来32年ぶりのことになる。世論調査ではバイデンの優勢が伝えられるが、失言も多いこの候補がそのままゴールインするかどうかは予断を許さない。(敬称略、6月30日記)

「エリザベス・ウォーレン」「カマラ・ハリス」「エイミー・クロブチャール」

ニューヨーク・タイムズ紙はこれら女性政治家の名前をあげて、バイデン大統領候補とともに選挙戦を戦う副大統領候補選びが終盤を迎えていると報じた。

バイデン自身が「副大統領は女性」と明言したこともあり、思想的な立場は別にして、民主党から女性の「ランニング・メイト」が選出されることは確実だ。

バイデン自身、2008年8月の党大会直前に、大統領候補だったバラク・オバマから指名を受けた。このときは、オバマに対して「経験不足」との批判が出ていたため、上院外交委員長などをつとめていた議会重鎮のバイデンを起用することでバランスを図る狙いがあったと解説された。

米国の戦後政治史をひもとけば、現職副大統領から大統領になったのは、第二次大戦中の就任となった33代のハリー・トルーマンを含めて、36代のリンドン・ジョンソン、38代のジェラルド・フォード、41代のジョージ・H・ブッシュ（シニア）の4人。このうちトルーマン、ジョンソン、フォードの3人は、前任の大統領が任期中に死去したかまたは辞任したことにより、憲法の規定に従い大統領に昇格した。

とりわけフォードは、ニクソン政権最初の副大統領だったスピロ・アグニューが収賄のスキャンダルで辞任した後に、下院共和党の院内総務から指名された。

この指名は1967年に定められた憲法修正条項25条の「副大統領が欠けたときは、大統領が副大統領を指名し、指名されたものは、連邦議会の両院の過半数の承認を経て、その職に就く」という規定が初めて適用

されたケースとして有名。また、大統領選挙を経ないでオーバル・オフィス（大統領執務室）にたどりついた唯一の政治家とも評されている。

一方、「大統領の有事」以外で、自らの力で予備選段階から政治的なバトルを勝ち抜いてホワイトハウスの主（あるじ）になった副大統領経験者は2人だけ。1人はブッシュ・シニア。もう1人はアイゼンハワー大統領時代に副大統領をつとめた経験がある37代のリチャード・ニクソンだ。

ちなみに、現職副大統領の身分で予備選挙を勝ち抜き、さらに大統領選挙にも勝利したブッシュ・シニアのケースは、1837年就任のマーチン・バン・ビューレン大統領以来のことだった。

副大統領というのは本来地味な存在で、ニクソンは後にこのポジションを指してこう評したとされる。

「副大統領とは米国の政治制度の中で、しっかり構想が練られたとは全くいえない、貧弱に定義された空の貝殻のような存在だ」

米国で人気のTVドラマ、『ホームランド』や『ハウス・オブ・カード』でも、副大統領役が「ホワイトハウスでは誰からも、何も、相談されない」と嘆くシーンが出てくる。大統領の名前を覚えてはいても、副大統領まで記憶している国民もそれほど多くない。

大統領候補に確定した人物は、党大会終了までに「副」の候補を選ぶ。過去の例をみると、その際に重要な基準となるのは選挙における集票能力だ。

たとえば、ジョン・F・ケネディが大統領に当選した際、大きな役割を果たしたのは上院院内総務から副大統領候補に抜擢されたジョンソンだった。ケネディは北部の名家出身のエリート。リベラルな政策、特にアフリカ系米国人の人権問題や身分向上を目指した公民権法の成立を政治課題のひとつに掲げていた。

しかし、これらの主張は保守的な土地柄である南部になかなか受け入れられない。このためテキサス州の出身で予備選挙の対立候補だったジョンソンを副大統領候補に指名。南部も「JFK & ジョンソン・チケット」で押し切った。国防長官に指名されるロバート・マク

ナマラはジョンソンのことを「品のない、学のない、二流政治家」とみていたようだが、結果的にケネディは僅差で共和党のニクソンを破って大統領に当選した。

また、ブッシュ・シニア時代の副大統領だったダン・クエールはインディアナ州選出の上院議員からの抜擢だった。当時まだ40代前半という若さに加え、ハンサムな風貌は有権者には受けた。

北東部出身だったブッシュ・シニアは、共和党内穏健派。クエールの起用は強硬派を含めた党内保守派の票取りまとめや中西部の保守票を狙っての起用とされた。当時クエールには上院議員としての実績はほとんどなく、指名は周囲を驚かせるものだった。

しかし、この選挙目当ての人選は、後にブッシュ本人につけが回ってくる。選挙戦当時からブッシュ・シニアの選択を疑問視する声もあったが、クエールは就任後も失言が続いて大きな実績を残せなかった。小学校を訪問した際「ポテト (potato)」のスペルを「potatoe」と間違え、世界の失笑を買っている。92年の選挙で副大統領差し替えがまじめに議論されたクエールの存在は、ブッシュ敗北の一因とまでされた。

一方で、「政治のプロ」を自認するワシントンの関係者たちをうならせたのが、クリントンによるアル・ゴアの副大統領候補指名だった。

このときゴアはテネシー州選出の上院議員。クリントン自身もアーカンソー州という南部の出身だ。また2人は同世代で、高等教育を受けている点などで共通点が多い。

通常副大統領候補を選ぶ際は、大統領候補にないポイントを重視するのが、民主、共和を問わず、それまでの「ワシントンの常識」だった。しかし、クリントンとゴアは似た者同士。この選択は果たしてうまくいくのかと周囲はいぶかったが、最終的には民主党関係者をはじめとする政界のみならず、メディアなどからも好感をもって受け入れられた。

クリントンは「政治家としてボスを裏切らない」という友人のアドバイスを決め手にゴアを副大統領候補に選んだという。

副大統領になってからの政治家はそれぞれの個性が出る。多くはニクソンが「空の貝殻」と名付けたような「お飾り」的存在で終わるが、ケネディ政権のジョンソン、ブッシュ・ジュニア大統領時代のディック・チェイニーのように、辣腕をふるって大統領を支える存在も。

ジョンソンはそれまで上院の院内総務として、政治的な手腕を発揮してきた。そんな彼を煙たがったケネディ周辺が、副大統領としてあまり重要でない会議の主宰者に祭り上げ、主要課題の意思決定から外そうとしたときのこと。側近からそれを聞かされたジョンソ

ンはこう言ったという。

「権力は権力者のところにやってくる」

もともと議会で、調整や根回しに実力を発揮した人物。派手な立ち回りは得意ではなかったが、そこはワシントンだ。ジョンソンは権謀術数渦巻くなか、議会対策などで手腕を発揮、大統領に昇格後、公民権法を成立させて歴史に名を残すことになる。

同じように強面で大統領を支えたのが、チェイニーだろう。もともとブッシュ・シニア時代に国防長官で頭角を現した政治家だが、ブッシュ・ジュニア大統領を前面にたてながら、インテリジェンスなどを握る。

その巧妙な政治的仕掛けで反対者を葬り去ろうというやり方は、「CIA秘密工作員名漏洩事件」でその一端が垣間見えることになる。

米国でCIA秘密工作員の身元を暴露するのは重罪に当たるため、イラク戦争開戦に絡むこの事件は一大スキャンダルに発展する。捜査の結果、ブッシュ政権の高官たちが関与していることが判明。「主犯格」として起訴されたのが、チェイニー副大統領の首席補佐官だったスクーター・リビーだった。副大統領本人の関与も疑われたが、最終的に立件は見送られる。

ただ、この一件でチェイニーは「政権に盾突くものを許さない」という体質であることを世間は印象深く受け止めた。

映画『バイス』はこのチェイニーを描いた作品。原題は副大統領の“vice president”からとったのだが、単独のviceには「悪」とか「悪徳」という意味もある。つまりこの映画は、副大統領の「副」を意味する「バイス」と「悪」を意味する「バイス」の掛詞になっているのだ。

これら個性派の副大統領に比べ、今のマイク・ペンス副大統領は、このままトランプ政権が終了した場合、「常に寄り添うように大統領のそばにはいたが、トランプという非常に強い個性の陰に隠れがちだった副大統領」として記憶されるだろう。いや。多くの国民はインディアナの州知事から副大統領候補に抜擢されたペンスの名前を、あっという間に忘れ去る可能性が高い。

民主党がホワイトハウスを奪還したとき、バイデンが指名する女性副大統領はペンスのような「お飾り」で終わるのか、それともジョンソンやチェイニーのような「バイス」になるのか。

そのあたりも注目の「ポスト・トランプ時代」だ。

参考文献

David C. Whitney, "American Presidents"

Randall Woods, "LBJ"

ボブ・ウッドワード「大統領執務室」